

的であり全く日本的領域にとゞまることをも批判する。單なる文學史でなく、その批判精神の根柢は勿論ヨーロッパの哲學であるがそれ故にこそ東洋の息吹きをば藝術でなく思想を以つてうけとめえたのである。藝術を通しての日本研究は多いが哲學思想を以てする根本的理解を示したものとて數少ない研究書の一つである。廣く讀まれることを期待したい。

著者ベンル博士は今(一九五八年九月)在日し一九五九年九月まで一ケ年の豫定を以て一休研究に没頭しつつある。戦前數年滞日したこともあり日本文化のベテランの一人である。又、日本の外國文化の輸入はキリスト教文化を入れず皮相な取り入れ方であつたと説く人々が日本にあるとすれば、奇妙な植民地的見方である。日本は古來、植民地と違つて個有の文化的傳統を持つてゐる中世的キリスト文化を必要としなかつた。現代ヨーロッパの近代文化が事實果してキリスト教的傳統の上にあるといへるであらうか。もしそう考へる者ありとすれば、キリスト教教師のフアナティックな觀察でしかないであらう。近代文化は洋の東西を問は

ず、宗教的傳統と必ずしも一致してゐない。それを如何に基礎付けるかは實は今後の問題であつて、中世的ヨーロッパ宗教によつてではない。日本のヨーロッパ觀は中世的ヨーロッパ觀に餘りにわずらひされてゐて現代ヨーロッパに見られるところの「中世的なるもの」と「近代的なるもの」との分裂に批判的眼をおほつてゐはしないか。かういふ東西兩洋の文化的交流といふ問題についても、該書はヨーロッパよりも却つて現代日本に於てより深く讀まるべきであり、そこに多くの問題を提供するに違ひない。

(Bspr. von G. H. Sasaki)

Kusum Mitrej, Dogmatische
Begriffsreihen im älteren
Buddhismus-Fragmente des
Dasottarasūtra

ss. 129. 1957 Akademie-Verlag

ドイツ・マカデミー(ベルリン)に藏されてゐる多くのトゥルファン發見の資料は次ぎ次ぎと貴重な貢獻を斯界に送つてゐる。新しいマヌスクリップトの發見といふことは現在、殆んどゆきすまりの

状態であるといふのが佛教學の現状である中でドイツ出版の該諸資料は英國のそれと共に世界に誇る二種の尨大な資料の一つである。先きにゾルドシユミッドは一九五〇—一九五三に諸種の原典を出した。最近、シュリンググロフの佛敎シェートトラ、ローゼン女史の律、ヘルテルのカルマブーチヤナが相次いで出版されたが今、このミツテル博士のダシヨツタラストトラはその中、最近刊に屬するものである。

ことに發見整理せられた十上經は巴利長部の終りに出でるものと、コレスボン下なるべきところの根本説一切有部の長阿含の梵文斷簡である。その梵文十上經(D. vol. III, S. 272~293)とサンギーチイ經(D. vol. III, S. 207~271)との價值について既に André Migot の報告がある(Un grand disciple du Buddha. Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient, XLVI, Fasc. 2, 1954, S. 526~27)。本經は諸派の律典に傳承され又、ピリザルスキーの漢譯からの翻譯も既に與へられてゐる。律傳によれば七經が代表的經であるが本經はその中の一つであ

る。その點で、經典史的に重要な意味を持つてゐる經であることは言ふまでもない。

次に注目すべきはその言語學上の意味である。概して佛教梵語經典はその文章形態の多様を呈示してゐる。しかしその多様性はシNTAX・S・IDEIOMの多様性程ではない。シNTAX・S・IDEIOMの表現の一貫性を把へることによつて思想の一貫性をも理解することが出来るであらう。

著者は梵文斷簡を巴利文並びに未出版のマヌスクリップト(例へば s. 474, Bl. 11 V4~5)によつて完全な形にとつてゐる。例へば、かく整へられた原形の中、十法ごといつ dharmata dharmast-hiata dharmaniyamata dharmayāhatā aviahatata bhūtaṃ satyata tatvata yathāthā avipartatā aviparyastatā と述べられる IDEIOM は大乘に於て「眞實」を現はす諸概念として用ひられるものである。その中 aviahatata は思想並びに言語の上からして不眞實の否定であるから非不如であるべきであらう。眞諦が「不如」と譯出してゐるのは誤りであ

つて玄奘の「不虛妄」なる譯例がより適切であるといふことも巴利との聯關に於いて一層確實に言ひうるどころであらう(辨中邊論第三品、眞諦・玄奘兩譯參照)。

著者が梵語原型を與ふるのに巴利語を主としてゐるといふ點は特筆すべきである。佛教梵語は多く巴利語その他のブラクリットの影響をうけてゐるのみでなく誤つた梵語化をへ行はれてゐることがあるからである。ここに與へられた梵語は凡て巴利ブラクリットについての充分な知識とマヌスクリップトに残る何らかの形の梵語を基礎としてゐる。然もその梵語には彼自の Ergänzung (補促)であるとして述べ還元梵語といふ常識的表現は用ひない。還元梵語といふ言ひならばはは學問的概念ではないからである。佛教梵語について巴利の知識なく、然も梵語の原形を何らとらぬ所に梵語をあてるのは英譯と同じ意味しか持たないところの梵譯に過ぎないものであらう。それには學問的意味は見出されない。梵譯、Ergänzung、還元梵語の三者は斷じて混同すべきではない。さうした反省を新しい意味でこの書は與へてゐる。

次に注意すべきはこのブラフミーで書かれたマヌスクリップトの特色を列記してゐる點である。例へば a が ā とされ又、ヴィサルガ・アヌスブーラの追加重要視といつた諸點は佛教梵語の成立を批判研究する上に缺くべからざる知識を提供してゐる。

著者は Bibliotheca Buddhica XII に出る kavāṅkara によつて何ら批判してゐないが、これは巴利語の kaḅāṅkara を原語とするから kaḅāṅkara とすべきであり、雜阿含のトウルフアン梵文斷簡でも巴利語の梵語化である (NGAW, Philol.-Hist. Kl. 1956, s. 46)。著者は前者をとらず後者に從つてゐるのは正しい。勿論 v を b とした例は多い。特にこれは東北印度に見出される。

一、二再考すべき個處も見出される。例へば梵文の缺けた部分を意味の上で補促したところ(六八頁註四)で巴利語の nekhamma に nāskhanya なる梵語を與へてゐる。然しこゝの意味は「好む」義でなければならぬ。もしさうすれば nāskhanya なる梵語は nīskhram で「出る」意味になつて「好む」とはなら

ない。「好む」でなければならぬから *nāskamyā*, 即ち *nis'kām* を語根とした梵語であるべきである。この梵語化は屢々古代の大乗梵語家によつて間違へられて梵語化されてきたが、この著者もまた、巴利の原意を見落してゐると思はれる。

とまれミッタル博士の該書は、我々に眞の梵語化といふものが如何なる操作を経なければならぬものであるかといふことを如實に教へた。又、それが巴利語の充分なる知識に照されてゐるといふ點で新しい光を投げた。經典史上にもたらした新資料としての意味は今更言ふまでもない。かかる原典の出版は今後一層佛教梵語佛典に於ける梵語そのものゝ再批判を要請するに違ひなご。

(Bespr. von G. H. Sasaki)

H. V. Guenther, *Philosophy and Psychology in the Abhidharma*,

Lucknow, 1957, XII+404 P.,

12×18cm

著者はオーストリア人、現ラウノー大

學教授。佛教教義の哲學的研究に従ひ、密教についても造詣が深い。この書は廣義の阿毘達磨文獻の中に示された「哲學」(著者に従えばそれは “the perennial quest for meaning” とある)と「心理學」(著者に従えば “abstract understanding by which man is engaged in comprehending himself” とある)とを説明しようとした試みで、心・心所、靜慮、色法、道 (*mārga*) という四つの主要な論題を取り擧げ、それらをパーリ上座部(主要な資料となつたのは *aṭṭhasālinī*)、説一切有部(主要な資料となつたのは俱舍論)・唯識派(主要な資料となつたのは阿毘達磨集論と莊嚴經論)のそれ々々の觀點から委細を詳しく論じてゐる。

梵語・パーリ語・チベット語に亙つて深い學殖のある著者であるけれども、この書は、假りに Stecherbatsky 教授の言葉を借りていえば、“philological” な研究とどうも響き合ひ “philosophical” なそれである。われわれは O. Rosenberg の *Die Probleme der Buddhistischen philosophie* や Stecherbatsky の *The Central conception of Buddhism* や C.

A. F. Rys Davids の *Buddhist Psychology* などに加えて、そういう阿毘達磨佛教の哲學的研究の分野において、新たな興味深い勞作を惠まれたといつてよいと思ふ。

著者は阿毘達磨が自らの問題とするところのものは何かを論じている。「われわれは先ずわれわれ自身に生きてゐるかという問題を端的に捉え、その解答を見出さねばならない」「假説や演繹的論證によつての思辨の上で得られるようなものではなく、じかにつかまえられるもの、そしてそれをわが身の上に引きあてて考へ得るようなもの、に對して眼を開くこと以外に、(佛教の、従つて)阿毘達磨の、目的とするところは無い」(四頁)。

そのような現實たゞいさの「體驗」を問題とする第一義的な立場から、阿毘達磨を見徹してゆこうとする著者は、例をば、色法が決して “thing” を “matter” ではなくて「知覺の成り立ちの場においてその客觀の側を構成するもの」であると(二二二頁)、「佛教の道」(*mārga*) は、至りていふべき目標をまず先に考へて